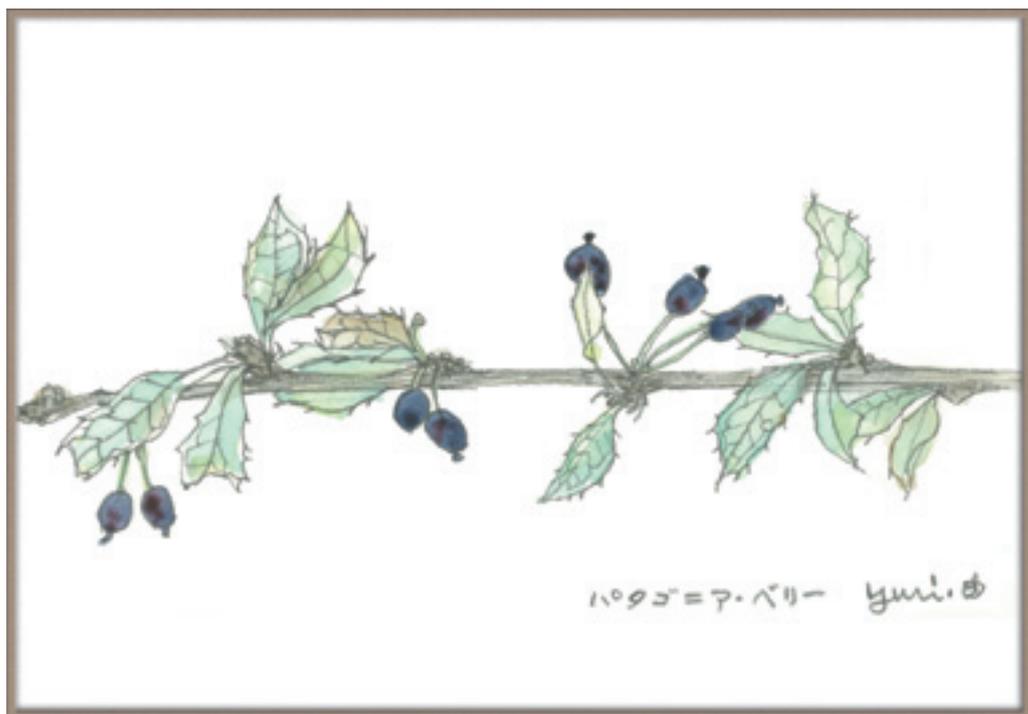


三河アララギ

平成二十四年

九月号

第五十九卷 第九号



ハナゴト=ア・ベリー yuni.φ

ニューヨーク日記(71) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

April 13, 2012 : Blue Hill at Stone Barns

Blue Shoe Diaries



マンハッタンからちょっとだけ脱出!牧場の中にあるレストラン、Blue Hill、に行ってきました~! メニューはもちろんその牧場で取れた物ばかり。食事の前には山羊やひよこにも会ってさっきまでマンハッタンに居たのが信じられないくらい。食事もとっても新鮮な素材ばかりだから美味しかった!何時も急いでるニューヨーカーにはペースがちょっと鈍いんだけどたまにはこゆう優雅な経験もいいですね!夜空を見上げた時に星が沢山見えたのにも感激!

Escaped from Manhattan for a great dinner at Blue Hill. The restaurant is in a farm and almost everything in the menu is from that farm. We got to visit the sheeps, baby chicks, and walked around... nature. The food was fantastic but if you go, be prepared for a long dinner as things are not fast paced like New York. When it gets dark, look up at the sky. You'll see a sky full of stars! Something we're not used to seeing in the city.

目次

第五十九卷第九号(通卷七〇五号)

表紙	パタゴニアベリ―	今泉	由利	(1)	軌道	秋山	逸穂	(27)
ニューヨーク日記(71)		Blue Shoe	(2)		半夏生	白井	信昭	(27)
感銘歌・御津磯夫第十歌集「御津磯夫歌集」			(4)		七夕飾り	阿部	淑子	(28)
歌集「本の木」		杉浦 弘	(5)		ミンミン 蝉の	富岡	和子	(28)
風の通りみち		岡本八千代	(6)		「ことよせ」	いーはとぶ	(29)	
月の光りを		今泉 由利	(7)		私の一首	青木 玉枝	(30)	
七夕まつり		弓谷 久子	(8)			杉浦恵美子	(30)	
土用丑		青木 玉枝	(9)			佐藤 喜仙	(31)	
アジサイ		内藤 志げ	(10)			近藤 映子	(31)	
熱田神宮		佐藤 喜仙	(11)			植村 公女	(32)	
反抗期		安藤 和代	(12)			一石	(32)	
苛立ち		伊藤 忠男	(13)			喜仙	(33)	
螢の住む里		林 伊佐子	(14)			皓一	(33)	
メロン		胃甲 節子	(15)			贈呈誌 七月号・八月号		
感激		金津 文枝	(16)			子規の短歌革新とアララギの歌人(2)		
黒砂糖		半田うめ子	(17)			ある自然科学者の手記(4)		
夫の発熱は		近藤 映子	(18)			絹の話(22)		
梅雨空に		清澤 範子	(19)			物理学者と詩歌の世界(32)		
生涯歌を		伊与田広子	(20)			短歌に詠まれた茂吉		
夫在りて		杉浦恵美子	(21)			鬼怒川紀行(2)		
紫蘇紅色		堀川 勝子	(22)			「水魚」のことから(140)		
夏椿		平松 裕子	(23)			ことのはスケッチ(405)		
美しかりき		山口千恵子	(24)			和菓子街道(71)		
夫の一声		小野可南子	(25)			お知らせ・編集後記・三河アララギ規定		
鬼怒川紀行(2)		夏目 勝弘	(26)					

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

竹いく種植ゑて竹の中に老い仙にも聖ひしろにもならず白頭

P 3

ポーチより躑躅の中へころげ落つつつじはやさし老の体に

P 4

歌集 「一本の木」

杉浦 弘

日曜のひとひをかけて妻と採りし青梅匂ふ夜の更けの土間

さはやかな光の中に出でてゆくすこしかび黴くさきネクタイをして

広辞苑は三千グラム言泉は二千五百なり言泉をひく

風の通りみち

蒲郡 岡本八千代

部屋の中高くに竹管を吊したり此処が風通る風のみちかと

風吹かば部屋に通^{かよ}へるけふの風竹管の風鈴にけふの音して

北の窓開けたれば風の通りみち君の風鈴のカラコロと鳴る

竹管のゆれて鳴る鳴る今日の日よわが居る部屋の風通ふとき

風吹かぬ時はカラコロの音はせずこの当り前のことのさびしさ

アキツ一つとび来て止まれり草の上しばらく彼を見てゐるわれは

夫の留守昼間も夜も冷素麵啜りて終へり私のひとり

夫のゐる博多の月も赤からむ今宵西浦の十日月赤し

入道雲もくもく白し海の上帰りゆく曾孫らにつきてくること

曾孫の一歳の心よく動き泣く時は泣くそのはげしさよ

月の光りを

東京 今泉 由利

幾歳いくとせを描き溜めたるデッサンよ反古と決めたり今日の夏の日

窓を開く網戸も開くる雲も無し私の部屋に月の光りを

満月と私との間まもぎつしりのダークマター・ダークエネルギー

情報はコンピューターに任せゐてひとり心はひとりたゆたふ

何もしないといふのではないこの時を静かに静かに静かにゐたい

口実は暑さといふよひと休み長く生きこし地球の上に

自らの手の温もりにあたたむる私の胸の私の心

つる草のイケマ若葉に卵ありアサギマダラとなりゆく卵

葉を花をイケマに育つアサギマダラ実の成る頃は海渡りゆく

毒をもつイケマに育ち毒をもつアサギマダラは海渡るとふ

七夕まつり

豊川 弓 谷 久 子

老いの目を凝らして仰ぐ夜の空今宵七夕天の川いずこ

里芋の葉に転がれる露の玉硯に取りて墨すりたりき

願ひ事書く事も無く短冊に七夕まつりと書き散らしたり

はしやぎつつ短冊吊りたり裏藪に父が切り来し大笹竹に

楽しみは七夕の夜盆の夜国府の祭りの花火の夜

帰心矢の如しと書きし八年前退院前夜の今夜の日記

我が庭に過ぎたる花よと楽しみし真白紫陽花も色移りけり

世にあらば共に八十路よ我が中の弟五十路兄は六十路ぞ

蝉時雨に包まれものを洗ひをり水冷たきを幸せとして

夢を食ふ糺羨やまし思ひ出を食ひて生きつぐ身となり果つる

土用丑

新城 青木玉枝

土用丑明日に迎へて遠き日の鰻さく夫の手許なつかし

谷深き山里に家二軒建つ谷を越ゆれば又三軒建ちをり

山猿も猪いのししも出る杉木立笑つて話す送迎くるま車の友が

山里にも梅雨は上りて夏が来る季の早さと伊丹への想ひ

呼びかくる声は届くやわが夫よ生くるもかなし山里に来て

青葉風ゆれゐる大樹の下にして小さき石仏ひそと立ちをり

この冬のきびしき寒さ身に沁みて夏を迎へりこの涼しさよ

高原はこんなに涼しき夏なりや初めて味はふ夏空の碧

おみたれ川の細き水路を流れゆく紫陽花の花びら一列に並びて

木曜日八時の歌謡コンサートわが青春の一こま一こま

アジサイ

豊川 内藤 志げ

病みあがり案じ案じつ畑に入り八百本の玉蜀黍収む

門に咲くアジサイ眺む男の子園にてアジサイ絵に書くと云ひ

アジサイの前に立ちゐる親と子に好きな色をと三花を切りぬ

二等品三等品に等外までみな貰はれるわが玉蜀黍は

顔を手を覆ひ攻め来る藪の蚊を手を打ちやみくも払う夕ぐれ

篋の深き緑を抜き出づる今年の竹の長き鋒先

藪草の中より一花藪茗荷急ぎ帰りて水切りをせん

家敷畑おどろに廣がる大南瓜透して探すも実の一つだになし

濁声に見上ぐ頭上に青鷺が南に向ふたそがれの刻

虫食ひの白く汚れし青葱も深葱苗にと貰はれて行く

熱田神宮

東京 佐藤喜仙

七世紀にその起源置く熱田宮民の崇敬厚き神々

尾張の国熱田の杜のおやしるに在すご神体草薙の劍

千年を越えたる杜のご神木大楠の樹は青空に抜け

紅葉映ゆる神の池の辺に売りたまふきよめ餅とふ心して食ぶ

文化の日宮きしめんが神域に売られてをりぬ名物なれば

多摩川に鮎の遡上の多きとか芒々として川は流るる

夏の月海に差しこみ細波は金波銀波の光返しぬ

溪谷の茶屋に木洩日こぼれをり禊の滝の音とよもせり

親鴉騒ぎ立てをるその先で子鴉今や巢立の時ぞ

鬱蒼とレバノン杉の杜深くフイットンチット匂ひぬるかな

反抗期

豊川 安藤和代

梨畑に朝陽の射せり袋から透けて青き実ふくらみの見ゆ

果物も野菜も今は季節なく挽ぎたてトマトの味の恋しき

吾問えば「別に」「知らない」それだけの反抗期ぞや中二なる孫

成長の大事な過程反抗期と思えど心ふつつつとして

高き事吾は望まず孫達よ雑草の如強く生きゆけ

思ふまま飾り気もなく見たままを詠みて何首ぞ吾が孫の歌

庭に建つ父の一句が刻まれた句碑に静かな雨降りつづく

浅漬けの茄子をしぼれば輝けりアメジスト色に指染まりゆく

もう七十才まだ七十と日の過ぎて今年も庭のカンナは赤し

苛立ち

大阪 伊藤 忠 男

梅雨末期降る雨激し田や畑の恵みとならず土奪うなり

節電のためとは言えど会議の場暑さにアイデア浮かばざりき

お粗末な資料配られ何を問う怒りに熱さ倍加するなり

東京は五月の気温関西はなぜに夏日か緯度変わらずも

先生に日取りを合わす出張の歯がゆきことか自由がきかぬ

窓からは抜ける青空爽やかと思へど吹く風熱きこと

梅雨明けと喜ぶ季節も突然の猛暑に身体追いつかぬなり

苛立ちを隠せぬ今宵熱帯夜眠る時刻も汗肌にしむ

明日の夢叶えるために立ち向かう今の試練も生きる力に

回復の兆しその手にこの足に広がる夢は友次第なり

螢の住む里

岡崎 林 伊 佐 子

ひとつふたつ迷ひし螢かペンライト振りたるわれに近寄りてきぬ
老いふたり宵闇に立つ庭先に螢は生氣の光を交はす

とらへたる螢は青き点滅をしながら吾の手紋を這へり

昼みれば川の流れも草むらも変哲もなし螢の住む里

つゆ空に居据る雲の切れ間よりつかの間をさす朝の光が

山道に虎杖のひともと嘯みながら終戦直後の幼な日思へり

虎杖をあらそひたりし幼き日おやつのならし飢え思ひ出づ

畑隅にはばかる如き蛇苺露にぬれ朱く目立ちぬ

「えにし」といふ歌集を賜はり文通し優しき友の訃報かなしむ

達筆な文字に書かれしアララギの知らざる事を教え賜ひき

メロン

豊橋 胃 甲 節 子

例年の田原の友よりメロン届き久しぶりなる楽しき電話

爽やかな性格の友は和服の似合ふ見事と云ふべき達筆の人

病院へ行く予約日の用水路の草々の中に咲いてた鬼百合

プランターに花より茂る草々の勢ほふ見れば気が急かさるる

あれも此れもと思ふばかりに出来ずして病みても主婦の家事とゆふ事

幾日も微熱続けば友よりの返信一通書き難きかな

咲き残る山梔二つ三つ咲きて横たふ吾に匂ひ漂ふ

ベランダに洗濯物干す見下ろせば百日紅の紅の初花

市民病院新築の頃は蓮田廣く花の見事さに驚きたりし

遙かなる十代の頃雨降れば蛇の目傘さし町の書店へ

感激

島根 金津 文枝

茂吉百年祭に上の山へ蔵王のお釜紺碧深き感激夫との思ひ出の足

鈴木啓蔵先生島根県地方事務所長記者の夫と出合ひし足

鴨山の茂吉の歌碑夫と行き波多野虎先生留守断りのハガキ戴く

長男初日ハツヒコ見早稲田大学入学式について参加素晴し入学式に行った足

次男月男新任地オキ隠岐の島へ飛行機で水平線よ眞赤な陽の出を見た足

三男トオル通関西大学へ万国博覧会に連いて行った思ひ出の足

長崎の茂吉の歌碑を尋ね石畳を歩いた夫との思ひ出感激の足

我一人広島原爆の音分析室で聞いた六十五年前の足

九十一才原爆の音を聞いた六十五年前いまよぼよぼの足

青戸慧紙塑人形の屋敷へ案内され夫と訪ねて行った足

黒砂糖

新城 半田うめ子

西川の川辺を歩く幼き日銀次郎さんの田の中に入りし

西川の近くにありぬ緑なし銀次郎さんの田を眺む

今日も犬の来てをらむかからす鳴く杉林の中はにぎやかなりぬ

幼き日黒砂糖貰ひしやさしかり今村公言様区長でありし

一人住む吾が庭の中数匹の猫の遊ぶ楽しみて見る

荒れ果ての玄関前に杉の葉の舞ひて来るなり風の吹きつつ

藪の中高く伸びつつ夏蜜柑数多に成りをりからすのさわぐ

畑中の柿の木見上ぐ青きにて数多になりをり楽しかりけり

小魚のそよぎゐるなり野田川の流れ豊かに楽しみ眺む

夫の発熱は

名古屋 近藤 映子

わが夫の発熱聞けば我胸は心配つのり胸ドキドキと止らぬ

我夫の発熱何度も繰り返し水無月の末も過ぎゆく

七月の一日日曜日我夫は落ちつきでテレビを見たり

発熱の収まりし我夫は何事も無き顔にてテレビ見る

月始め多忙の娘夜遅く度々時計を見上げ吾待つ

七月にまだ雨のしよぼ降る続く日にアンスリウム紅く咲く

夫見舞ひ穏やか顔にホットせり手足擦り居て時の過ぐる

七夕の過ぎて雨の日続きたり見降す川の泥水流れよ

見降しの香流川の草色水面に育ちし子かも親と連立ち

夫見舞ひ冷たき手足を擦りたりぬくもり来れば顔も穏やか

梅雨空に

春日井 清澤 範子

雨の日は自転車に乗れずただ家の廊下より椿の繁り見てをり

梅雨空に一点明るき瞬間に小鳥は高き屋根に飛び立つ

菜園の草取り吾は楽しみて夫と植えたり茄子とトマトを

狭窄症の手術をしたる夫と来て夏野菜苗選ぶは楽し

晴れたかと思ふ間もなく俄か雨梅雨の一日今日目まぐるし

雨の中にも鳥の声あり廊下より庭に育ちし椿見てをり

梅雨のうち台所に立てば吾が耳に雨の中にも鳥の声あり

八王寺神社を詣で柏手を打つ時聞きぬ初蟬の声

新聞の台所情報読みながら新ごぼう煮るゴマ油落して

ピアノ弾く夫に合わせて吾歌ふ「青い山脈」軽快なリズム

生涯歌を

豊橋 伊与田広子

恵美子様優れた御歌詠まれしに天寿全うされしか御冥福を

八重子様元氣にお歌詠まれをり何の因果か悲しかりけり

念仏を口ずさみつつ頂きし寒椿あらためて読むなり

われも又何時かは逝かむ元氣にて生涯歌を詠み続けたし

田尾さんの意欲にわれも元氣づくわれに出来ることやりたし思ふ

三五度猛暑の続く日日にして外には出^{いで}ず家に籠りぬ

毎日の猛暑なりしに買物に行けずとなりて冷蔵庫漁る

雨のなき猛暑の続きわが庭の柿の木は小さき実を落しをり

猛暑にて一滴の雨も降らずして庭の木木には水をやらねば

千両は森や林に自生する窓際避けて元の位置に戻す

夫在りて

蒲郡 杉浦恵美子

生きて在ればよいこときつとあると言ふ夫の遺言実感できない

夫在りて楽しみもまた愉しみと感ずることに思ひ到りぬ

夫が居るただそれだけがどんなにか幸ひなること今更思ふ

あああんな処に月と我が言へば夫頷きぬ深夜の病棟

山の端の月を病棟窓に寄り共に眺めし夫ぞ恋しき

丑の刻病棟の窓我が夫と最後の最後の見し月

梅雨明けて夏始まりぬ夫の居ぬ二回目の夏如何に過さむ

我が夫の遺しし眼鏡無機質に何も語らぬされど愛しい

右横に座りし夫婦の諍ひに耳傾け居り少し羨む

食器棚に仕舞ひし儘のワイングラス夫亡き今は使ふことなし

紫蘇紅色

豊川 堀川 勝子

花咲けばなどか可憐な「赤まんま」花穂垂るるまで刈らずに置かむ

大犬蓼の撓い靡きぬ穂の先を食用にする習慣ならいあるらし

棚の支柱歪めて太く絡みゐるキウイの剪定の季また巡り来

枯れ枝と見立てて伐りたる枝先に五つ六つのおさな実のあり

四日目のキウイの剪定に疲れ果て握れる鋏たびたび落とす

自家栽培の紫蘇を無駄なく摘みつみて色よき梅干し今年は仕上ぐ

昼は干し夜には梅酢にまた戻す土用の我は梅干し三昧

艶つやと紫蘇紅色に染まりたる我が梅干しは味もよろしも

四方より枝差し交わしこっぴりと我が大ざくらは屋敷を覆ふ

防鳥ネット頼りて蒔きたる大豆種萌ゑ来し小苗の緑小さく

夏 椿

豊川 平 松 裕 子

この道を右に行きてもその先に母はゐませぬどこにゐますか

逝きて早や四月となりぬ茶頭の手前今日床の間の花は夏椿

タオル濡らし首に巻き付け涼をとる描きたる眉はとうに剥げをり

髪も化粧も乱れに乱れ暑き日の終はりて店のシャッター降ろす

蜂の巣を取るは訳無きことと思へど共生するを我は選びぬ

狭き庭のどこに植ゑむか梶の木の幼木届きぬ東京の子より

我が峡の西の山の端に陽は落ちて庭に影さす真夏日の今日

屋根裏より父の遺品を出しくるる兄はいつよりか癌を病みをり

頂きしミンサア織のシオルダーの紐をなをしてまた使はむよ

言葉にも物を見る眼にもまねのできぬ歌読みなりきその人はなし

美しかりき

豊川 山口千恵子

清さやと風透りゆくゴーヤ棚葉陰に細きカマキリの仔

緑色ゆらして風の吹き透る吊りたる網にゴーヤの繁る

母なる国知らずに育つ仔象のマーラ飼育員にあまえまつはる

人の手に育ち体重四百キロ仔象は遊ぶ象舎の中に

畑土を深く耕し畝を掘る貰ひし葱の苗を植ゑゆく

貰ひたる葱苗太く育てむよわが畑隅に一列に植うる

ぐんぐんとその葉大きく広げつつ天狗ナスなる茄子つひに生る

花咲くは一花のみのミニ蓮の丸葉さはさは鉢に繁れり

今月号に歌無き八重子さん原稿の文字の美しかりき

亡き人の家に届ける八月号玄関脇のポストに落とす

夫の一声

豊川 小野可南子

佐奈川を渡りくる風夕つ風若き虎杖さはにさはさは

細々の川畔の道我が前を一羽のひばり先立ちゆきぬ

冠毛の未だ伸びざるも雲雀なり怖るることなく我が前を行く

畑より帰れる夫の一声は昨日きのうより今日の西瓜の大きさ

開きはじめの蓮はつすの花をのぞき込む実となる形の黄に輝く

信玄も謙信も児は聞かず塩はどうして運び行くかと

塩を背に山越えをして死にし馬そを悼みての馬頭観音

忘れものを取りに戻りてそを忘る忘ることを忘れてをりぬ

足音を立てずに夫は午前四時遠き野畑へ出かけてゆきぬ

ギャラリとなりて見下すプールなり飛沫しぶきましろは佑真の泳ぎ

鬼怒川紀行(2)

豊川 夏目勝弘

東京より三時間余にて国生町思ひは近し子規への憶ひ

子規を慕ひこの畑道を通ひしや春日に汗していま歩みをり

尺をこす蒨葎草の畑の道節を思ふ節は子規を

白帆たて鬼怒川上りし高瀬舟今日の流れはとみに穏しき

篠の上に白帆の見えしとその篠の堤の道を緩る緩る歩む

鬼怒川の堤の道を狭め咲くカラシナの花粉が顔に付きくる

鶯の鳴き声絶えざる堤道子規に繋がる人人うかぶ

鬼怒川を渡す水棹いまは見ず春の浮き雲川面に白し

改良のなりし広き田整然と鋤ふる農夫の姿みるなし

もどかしく舟に渡りしことならむ我はたちまち新鬼怒川大橋

軌道

招待 秋山逸穂

十八階屋上に来て見上げるは遮蔽物のない夜空は寂しい
陽を浴びてかがやく小川の流れよりささやくように水音聞こゆ
終電の通り過ぎたる軌道より遠ざかる音かすかに聞こゆ
朝の雨に紫陽花の垣根艶を増し雨傘の影かすかに写す
蔓のばし垣根をおおう昼顔のみだれて咲けど花は匂わず

半夏生

豊川 白井信昭

ひらひらとアサギマダラのひらひらと行方追ひつつさがらの森に
台風にて運ばれ来たりし流木のうず高くして悲しき芥^{あぐた}
境内の鬱蒼として杉木立真白ひともと半夏生見ゆ

七夕飾り

横浜 阿部 淑子

エイゼットの七夕飾りに願い込め幸せ満ちぬ集合写真

エイゼットの互に交す言葉端人の年輪の深さを思う

あちこちのデイを巡りし入会者活気満ち満つエイゼットにあう

眠られぬままにつけたるテレビよりクイズに学ぶそうなの納得

蒸しかえる暑さのなかを親つばめえさ運び来る子つばめのもと

ミンミン蝉の

東京 富岡 和子

仏前のなすときゅうりとこうべあげ孫が作りぬ迎え火揃う

兎らかける公園の丘にねじれ花凜と立ちをり腰痛忘る

書の会の新国立へ誘ひ合うたゆまぬ友の半世紀あり

「ヨッチャン〱西洋〱ごぼうの色出たよ」ままごと仲間は後期高齢

待ちましたミンミン蝉の初鳴き日ナデシコジャパン初戦を飾る

『いじよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

緑こき詩仙堂の庭に娘とわれいづこからかのこの僧都の音

山崎 俊子

乗り納めに西浦半島をひと巡りけふを限りのわが家の車と

三田美奈子

梅雨の日のブルーの気持癒されりこの夏椿のほのか白きに

稲吉友江

佇ずめる水門川の辺水草は濃みどりゆれて流れのままに

鈴木美耶子

水無月の潮風薫る「竹島」にてわがお点前の抹茶のさみどり

吉見幸子

雨降りの肌寒き午後には孫を待つ迎へは無しの暮しの孫を

牧原正枝

かつて母の大好きな花著莪の花はやも庭には花を終へつつ

岩瀬信子

七ヶ月つかまり立ちの曾孫に梅雨のひと日のたのしきわが家

石田文子

私の一首

露の臺たらの芽天ぷら頂きて夕食の卓は山里の味

青木玉枝

都会を離れて山里に住みきびしい冬も去り、土手に見るは名も知らぬ草や花露の臺など見た事もなく裏の家のおじいさんが教えて下さり私の家の裏土手にも沢山あり初めて撫でてみました。夕方おじいさんが露の臺、たらの芽他に春の草を二枚入れあげたての天ぷらを小鉢に持って来て下さり本当においしく山里の春を初めて頂き夕食の卓はビールも飲み感謝の食卓お返しにAコープにて魚を購入届けました。空気の美味しい事一番嬉しいです。

オーロラを見にゆかむとぞ思ひ立つ服喪を過ぎて踏み出すために
杉浦恵美子

無責任な申し方ですが、「私の一首」で取り上げていただいて「そう言えばそうだった」と思い出しました。わずか三ヶ月前のことなのに。しかし改めてその頃の悲壮な決意を我ながら微笑ましくも思います。夫健在の頃は海外の旅は全て彼が手配してくれましたからこれからは何もかも自分でやらなくちゃと随分気負っていたようです。実際に旅に出て、幾つかのトラブルを克服できた結果、あの時の悲壮感もむしろ懐しくさえ思います。

外苑の雪の中より飯桐の赤き実拾ひ机上に飾る

佐藤 喜仙

今年 は 毎月 「新宿御苑」 に 吟行 し、 季節 の 移ろい を 肌身 で 感じ と ろ う と 考 え て お り ま す。

一 月 の 吟行 当 日 は 晴 れ て い ま し た が、 前 夜 に 降 つ た 雪 が 五・六 セン チ 積 も つ て お り ま し た。 苑 の 中 の 玉藻 池 に 出 た 時、 高木 の 下 の 雪 の 上 に 赤 い 実 が 落 ち て い ま し た。 飯 桐 の 実 で す。 飯 桐 は 秋 に 赤 い 実 を 房 状 に つ け る の で す が、 何 し ろ 高 所 な の で 一 粒 一 粒 は 見 え ま せ ン。

雪 の 上 に 赤 い 一 粒 の 実 を 見 付 け た 時、 大 変 嬉 し く な り 大 事 に 家 に 持 帰 り ま し た。

物言わねど夫との握手吾の手をじんわり握る力あり

近藤 映子

夫 が 出 先 に て 脳 出 血 に 倒 れ 救 急 車 に て 日 赤 病 院 か ら 八 回 の 転 院 に て 八 年 目 の 現 在 が あ る。 今、 会 話 は 出 来 な く な つ た が、 娘 と 私 が 殆 ど 毎 日 か 一 日 置 き に 見 舞 う。 会 話 は 出 来 な い が、 娘 と 私 を は つ き り と 見 分 け て い る。 私 は 夫 の 部 屋 に 入 る 時 は 必 ず 手 を 洗 つ て マ ス ク を す る。 そ し て 夫 の 手 を 取 る と 声 は も う 出 な い し、 手 の 力 も 弱 つ て 来 て い る が、 私 の 手 は 分 か る 様 子 で 手 を 取 れ ば じ わ り と 握 つ て く れ る。 そ ん な 力 を 私 は 感 じ 取 る こ と が 出 来 る と 言 う こ と で あ る。

「俳句」

仏壇のほおずき灯り夜の底

植村公女

サイドミラー点となりゆく夏帽子

雨あしの太くなりゆき立葵

想像は時空を超えて夏夜空

一石

満天の星や晩夏の物語

ぽっかりと何を語るか夏の月

玄海の風と波立つ祭舟

喜仙

炎昼や元アイドルの葬の列

溪谷の茶屋に木洩日心天

ともどもに白髪まじる生ビール

皓一

赤々と夕暮れ月のビアガーデン

亡き父の朝昼夕のビールかな

贈呈誌 七月号・八月号

襖に残る絶筆の句を読みかへし窓辺の糸瓜を再び見上ぐ

上坂和枝

「愛媛アララギ」八月号

徳本タエ子

その奥はうす紫にけぶりつつ榛の木立は若芽ついたり

棟さく朝の堀端歩みゆく共に愛でたる友偲びつつ

「群山」七月号

伊藤 太一郎

中村美鈴

爪だけは伸びると老いし母言ひき新聞紙の上に夜の爪を剪る

トネリコはわが白塀に影うつし墨絵のごとく動くともなし

亀井榮記

「鹿児島アララギ」七月号

重盛ヒサ子

冬眠より醒めし蛙のくぐもり声姿見えねど田より湧き立つ

南天の花白々と散る庭に濡れて重たき火山灰を集めぬ

鈴木秀子

千葉源治

先づ小さき薬缶をガスにかけしより只一人なるひと日始まる

砂浜に波の打ち寄す紋様は津波に逝きし人の便りか

草谷恵子

「高知アララギ」七月号

大岸由起子

言葉選びて励まししを我が思ひをり助からぬ命と知りたる日より

育苗ケースに並べ播きたる瓜の種培土動かしみな天を指す

古川千鶴

安井美佐

田を植えて田の面に淡き苗の影

天を突く長さのクレーン首ふりて河川工事の太き音ひびく

ハンガーの針金見ゆる鳥の巢

「柘」七月号

竹内眞子

子規の短歌革新とアララギの歌人(2)

佐藤 喜 仙

子規の幼名は処之助^{しころのすけ}、後に升^{のぼる}とされ親族、友人は升^{のぼ}さんと呼んでいた。幼少の頃の子規は人と争うことを好まぬ、無器用で内向的な少年であった。そのことは「墨汁一滴」明治三四年四月八日の項で自ら語っている。

僕は子供の時から弱味噌の泣味噌と呼ばれて小学校へ往つても度々泣かされて居た。たとへば僕が壁にもたれて居ると右の方に並んで居た友だちがからかひ半分僕を押し来る、左へよけようとすると左から他の友が押して来る、僕はもうたまらなくなる。そこでその際足の指を踏まれるとか横腹を稍強く突かれるとかいふ機会を得て直ちに泣き出すのである。そんな機会はなくても二三度押されたらもう泣き出す。それを面白さに時々僕をいぢめる奴があつた。併し灸を据える時は僕は逃げも泣きもせなんだ。然るに僕をいぢめるやうな強い奴には灸となると大騒ぎして逃げて泣いたりするものが多かつた。これはどつちがえらいのであろう。

この述懐記によるとただの弱味噌とは異なる少年であつたことが読みとれる。やはり母親譲りの芯の強さは子供の頃から持つていた気質である。その子規に強い影響を及ぼした人物が、八重の父、子規の祖父大原観山であつた。子規は六歳の頃から観山の塾へ素読を学びに通い、観山自らの教えを受けた。観山は「升はなんぼたん」と教へてやつても覚えるけれ、教へてやるのが楽しみぢや」と言つてをり、子規の頭脳明晰は幼時から發揮されていた。

子規の正式な教育は、明治六年(一八三三)法竜寺という寺に設けられた末広学校(のち智環学校と改名)という寺子屋式の小学校に入学、翌七年高度な授業をする勝山学校に選ばれて転校した。同時に朝早くから、観山の弟子土屋久明のもとに通つて「五経」「八大家」「戦国策」「史記」「春秋」「資治通鑑」「日本外史」「政記」「皇朝史略」等を学び、漢詩文の世界に没入した。更に明治十一年の夏からは、土屋久明の手ほどきを受け漢詩を作り始めている。「一声孤月下 啼血不堪聞 夜半空欹秋 古鄉万里雲」明治十一年、子規十一歳の時の作品である。

ある自然科学者の手記 (4) 大橋望彦

「DNA鑑定雑感」④

比較的最近、DNAの組み換えとか、遺伝子組み換えという言葉が普通の雑誌や新聞誌上で見られるようになった。これは、染色体の中にあるDNAに外来のDNAの断片を挿入させる一つの技法であるが、一般には、ある特定の遺伝子のDNAの一部の塩基配列順序と、極めて類似した塩基配列順序に目的のDNAを結合させた外来DNAを合成し、細胞に新しいDNA塩基配列順序を注入する。

その注入されたDNAは、特定の遺伝子のDNA塩基配列順序を認識して、元のDNAと外来DNAとが入れ替わる。この現象をDNAの組み換え（コンビネーション）という。外来のDNAには目的としたDNA塩基配列順序が入っているの、新しい遺伝子が作られたことになる。

勿論この入れ替わることは頻度としては非常に低いのだが、色々の操作によりこの頻度を上げる条件が検討され、遺伝子を操作することがかなり簡単に出来るようになって来た。しかし、先に説明した、体細胞は二倍体（2N）の染色体から出来ており、なかなかこの二倍体（2N）のDNA組み換えは成立しない。それが生殖細胞の一倍体（1N）になった細胞では、容易にこのDNAの組み換えが起こることが知られている。

何かこの二倍体の染色体にはDNAの組み換えを制御する機構があるのかもしれない。そして一倍体のDNAではその機構が外れていることが想像される。これこそ、精子と卵子の間でのDNA組み換えが起こる最高のチャンスであり、その組み換えが起こることで兄弟、姉妹で個性の違いが出来ることの極めて高い可能性を考えることが出来る。しかもその組み合わせは無限と言えよう、それは格好のDNA鑑定の対象となるのである。

これは突然変異ではなく、正常な遺伝子の交換である。それ故、奇形児等先天的疾病の生ずる頻度も低いのである。唯、一つどうしても疑問が残ることは、このDNAの組み換えが必然的に生じるのか、どういうことで、本来組み換えは起こらなくてもいいのに、なぜ起こらねばならないのか?この疑問は、生物の最初の段階（受精卵）で起こる必然性と、最後の段階（老化して死ぬ）でも何故それが必然性を持つ宿命なのかは永遠の謎なのか？

さて、ヒトの指紋が個々に異なっているのは、DNAの変化の究極の反映といえる。受精卵で変化した事柄は細胞の分裂の時期、分裂の方向等、実に詳細な部分までに影響を及ぼして、ついには指紋の成り立ちまでにも及んでいるのである。

ここで、DNA鑑定には検体として、DNAが安定な状態を保っている体細胞由来のDNAを調べている時は、殆ど問題が無いことが理解出来よう。また細胞に含まれる全てのDNAを使っているので、前述のエクソンのみならず、イント

ロンも一緒に扱っているので、そこに含まれる積り積った未修復の多くの損傷も、また、遺伝子の発現とは関係の無いところで生じているDNAの組み換えも、生命現象に直接関与しないので温存されている。結果としてDNAの変化が多く含まれていることも容易に理解出来よう。これは、DNAの個体差に大いに貢献しているともいえる。なお、精液等のDNA鑑定は以上のことからさ十分注意することが必要なことも理解出来よう。本当の所、精液中の個々の精子での位DNAの塩基配列順序が違っているのが知りたいが、現在の検出精度では望む術も無い。

体細胞DNAが個人別で変化してきたのは長い年月が掛かってきたのであろうが、人は進化と共に変化してきたものと考えたい。しかし、時代と共に危険因子（突然変異誘発因子）の種類も増加し、医療、薬品、化学工業、食品、環境汚染等の変化も著しい近代社会では、そのDNA分子の変化も著しく加速していることが推測される。

（つづく）

絹の話 (22)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

現代日本人と絹 (その2)

10話で一般の方々の虫と繭と絹の認識、絹の好き嫌い、戦後のバブルの販売の流れ等をお伝えしましたが、再度、市井の人々の絹への認識の様々を販売の現場から拾ってみて、生産、販売（接客ノウハウ）に役立てたいと思います。

先日某デパートで、他の売り場で着物地の端切れを購入して来たと言うお客様と散々「絹」談義をしました。お客様曰く「お宅の看板は野蚕シルクとなっているが、シルクは何処に展示してあるか？」ここにある物は全て野蚕か家蚕のシルク製品です。と答えると、すっかり困惑して帰ってしまいました。この方の様に絹とシルクは異なった素材と思っている人がかなり大勢いらっしやいます。同様に「綿は大好きだが、コットンは着ない」などと公言してはばからない人も少なからずいらっしやいます。麻とリネンに至っては、販売員に「麻

ですか？」と尋ねると「いいえリネンです」と答えるデパートも有ります。苦笑してしまいますが、笑えぬ現実です。

こんな事になった原因は商品表示法では漢字で「絹」と書く事が義務づけられていますが、コマーシャルの世界には規制がなく横文字表示が多いので、お客様の中にはそれぞれ違った素材と思い込んでいる人がかなりいます。

混乱しながらも世の中は平和に進んでいるのです。特に年配者に多く見受けられますが、現場でそれを矯正することは大変むずかしく、話術のいる事です。「同じ物です」と言うといい加減な事を言うやつだ！とお叱りを受ける事もあります。

私共では野蚕の絹製品を販売する時は必ず、野蚕の各種繭を展示して、糸の性格などを説明することになっていますが、一通り話し終えて首を縦に振って了解して頂いたと思つた矢先、「ところで、此れ等の素材は何ですか？」と質問されることは日常的な事です。つまり、繭から絹糸を採って、絹織物を作ると言う事が判っていないとしか思えません。

また、10年近く前から野蚕絹の日傘を製造販売していま

す。一番の製造目的はムガ蚕やクリキュラ蚕を筆頭にタサール蚕等が持つ防紫外線性です。更に繊維が高温にならず、木の下のように涼しく、高温多湿の時出る僅かなマイナスイオンが気持を和らげ、生地の日焼けが殆どなく、軽量いと云う利点を利用した物です。日傘を手にと取って見ている人に、それらのセールスポイントを話すのですが、毎日実によくの方々に「UVカット」はどうですか？と聞かれます。

勿論UVカット効果は是是然々なものが有りますと答えらるとお客様は安心されます。お客様にとっては紫外線とUVは異なる物なのです。中には「UV加工」してないですか？と聞く人もいますが、そのような危険（未知数）な加工はしていませんと言うと、「そんな物は要りません」と帰ってしまいます。報道関係にUVと云う表現が多いので、UV云う物をカットすれば良いと頭に刷り込まれているようです。テレビの天気予報では何処の番組でも紫外線と云う言葉を使っているのにと恨めしくなります。

毎日何度か、シャリ感のある絹製品を見て「これは麻ですか？」と質問されます。絹は柔硬色々な糸（オーガニックに

もなればシホンにもなる）を作る事が出来るのですが、一部の人は絹はフワフワ、トロトロな物だ！と思込んでいる節が有り、シャリ感のある物は受け入れてもらえない事も有ります。この様な人は屑糸の絹紡糸を好む傾向に有ります。

たまには「オーガニックシルクは有りませんか？」と云う質問を受けます。繭を作る環境は農薬が大敵です。絹は将にオーガニックなのです。

時には純白の野蚕布を求めて来られる方もいらつしゃいますが、野蚕糸には純白は有りません。虫が育つ環境の中で、繭は蛹が安全に生き残る為の最大限の防御色を持っています。その色を抜いても、糸はシャンパンゴールドの様な色になる物が多いのです。その様な色を慈しみ楽しんで下さいと答える事にしています。

見慣れない野蚕絹製品を見て、多くの方が「タイシルク」ですか？と尋ねます。タイシルクは家蚕の一種で野蚕では有りません。これを説明するのは意外と大変です。

絹は30歳以下の方には殆ど見向きもされません。健康と環境、感性、省エネにこれほど優れた素材は無いのですが!!

物理学者と詩歌の世界 (32)

一石

ジュリアン・シュウィンガー

ジュリアン・セイモア・シュウィンガー (Julian Seymour Schweinger, 1918—1994) は米国の理論物理学者。1965年にノーベル物理学賞を受賞。

ニューヨークでポーランド系ユダヤ人の家庭に生まれる。父は当時オーストリア＝ハンガリー帝国の支配下にあったポーランド中南部の都市ノヴィ・ソンの出身、母はウッチ出身。ニューヨーク・ステイ・カレッジに学び、1939年、コロンビア大学のラビ (I. I. Rabi, 1944年度ノーベル物理学賞受賞) のもとで、博士号を得た。その後カリフォルニア大学バークレー校での研究生生活の後、パデュー大学で教育・研究に従事した。第二次世界大戦中はマサチューセッツ工科大学の放射線研究所でレーダーの開発に加わった。戦後 (1945)、ハーバード大学に移り1947年には教授に就任、1974年まで勤めた。ハーバード大学在職中にラムシフト (脚注1) の説明に繰り込み理論 (脚注2) を適用して成功をおさめた。これにより量子電磁力学 (脚注3) の完成に大きく寄与したとして朝永振一郎 (参考資料3)、リチャード・P・ファインマン (参考資料4) とともに1965年のノーベル物理学賞を共同受賞。素粒子物理学の分野で1957年の論文「基本的相互作用の理論」で新しい

素粒子の存在について先駆的な予想をおこなった。1972年から死去するまでカリフォルニア大学ロサンゼルス校の物理学部の教授として教鞭を執り、研究に没頭した。

強い電場中で真空からの粒子・反粒子の対生成が起こることを最初に示した。それに必要な電場強度は彼の名を取って「シュウィンガー極限」と呼ばれる (脚注4)。また、場の量子論の計算に用いられるシュウィンガー・ダイソン方程式 (脚注5)、ラリタ・シュウィンガー方程式 (脚注6)、リッブマン・シュウィンガー方程式 (脚注7) 等で知られる。

著書に『シュウィンガー量子力学』 (参考資料5)、『アインシュタインの遺産 時空統一への挑戦』 (参考資料6)、『Particles, Sources, and Fields』などがある。参考資料3はシュウィンガーがカリフォルニア大学ロサンゼルス校で1980年代に行った量子力学の講義をまとめたもので、彼の独自の哲学と方法を基礎とし、観測に基づく量子論の導入および量子作用原理から導かれた量子力学を体系的に記述している。第1回目のアインシュタイン賞 (1961)、米国家科学メダル (1964)、ハーバード大学名誉博士号 (1962) など多くの栄誉を得た。

シュウィンガーについてのエピソードをいくつか紹介する。○シュウィンガーは理論物理学において早熟の天才振りを現している。16歳にして最初の論文を刊行。21歳の時にコロンビア大学で博士号を取得したが、その博士論文はその2、3年前にはすでに完成していたと言われる。

○研究の指導者としても優れ、4人のノーベル賞受賞者 (R・

グラウバー、B・モッテルソン、S・グラシヨウ、W・コーン(化学賞)を指導している。

○量子電磁力学の研究業績で1965年度のノーベル物理学賞を分けあったシュウインガーと朝永には類似点がある。このことはシュウインガー自身が、1980年に朝永追悼講演の中で述べている。研究歴が似ていただけでなく、名前にも共通点があるという。朝永振一郎の振と、シュウインガーの姓の初めの部分 Schwing (ドイツ語)は、どちらも「揺する」を意味している。そのときの講演をシュウインガーは「物理学をゆるがした2人」(参考資料7)と題した。

脚注1…マイクロ波による水素原子の微細構造の実験値が見出された。その「ズレ」をラムシフトと言う。

脚注2…量子電磁気学において電子の自己エネルギーの無限大の寄与を、実際の質量と電荷の観測値を用いて有限な値に「繰り込む」ことで解消する手法。

脚注3…量子電磁気学は荷電粒子と光子を記述する相対論的場の量子論。非常に高い精度で実験と一致するため、最良の理論と評されている。

脚注4…この過程を実際に引き起こすには、エネルギー・運動量保存則を満たすために、通常は電場以外に1個の光子の入射が必要である。

脚注5…シュウインガー・ダイソン方程式とは場の量子論におけるグリーン関数の間の一般的な関係のこと。

脚注6…スピンの2を持つ相対論的なフェルミ粒子を記述する運動方程式のことをラリタ・シュウインガー方程式という。

脚注7…リップマン・シュウインガー方程式は量子力学の散乱理論における基礎方程式。

参考資料

- 1) Wikipedia, the free encyclopedia
- 2) フリー百科事典『ウィキペディア』ジュリアン・シュウインガー
- 3) 三河アララギ、朝永振一郎、p 36、第58巻、第7号(2011)
- 4) 三河アララギ、R・ファインマン、p 36、第57巻、第12号(2010)
- 5) B・G・エングラート編(清水清孝・日向裕幸訳)、『シュウインガー量子力学』、シュプリンガー・フェアラーク東京(2003)
- 6) J・シュウインガー(戸田盛和・米山徹訳)、『アインシュタインの遺産 時空統一への挑戦』日経サイエンス社(1991)
- 7) J. Schwinger, "Two shakers of physics: memorial lecture for Sin-iro Tomonaga." In: The Birth of Particle Physics, eds. L. M. Brown and L. Hoddeson (Cambridge Univ. Press, Cambridge, 1983) pp. 354-75.

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

六、結城哀草果 1

生涯を山形で過ごした結城哀草果は大正三年四月に茂吉によってアララギへの入会を了解されている。大正四年十一月に祖母の葬儀のために山形に帰省した茂吉に初めて会って以来師弟の関係を深め、農業に従事しながら生涯厚く仕えた。

祖母の見舞いに帰郷していた茂吉は哀草果に宛てて、「祖母上重病の報に接し突然帰郷仕り候ところ祖母上つひに死去いたし十八日に葬式の予定に御座候。大兄御都合よくば十九日に御出で下されたし。一寸御目にかかり歌についての注意など御話いたしたく候」と手紙に書いている。結局、哀草果は一六日に茂吉を訪ねその夜のことを「先生と枕を並べて床に入ったが、興奮してなかなかねむれなかつた」（斎藤茂吉先生の初印象）と回想している。

先生に会ひに行くなれば足乳根は絹の着物を着せにけるかも

山国の静かなる夜に念仏のかなしき鉦はいまだつづけり
（『山麓』）

これは大正五年七月に父の病氣を見舞うために山形に帰省した茂吉を訪ねたときの歌である。その前に茂吉は哀草果に、「父上小恙ノタメ帰国イタシ候、御多忙ナランモ一寸逢ヒタシ。滞在ノ日数少キユエ、至急ノ方ヨシ、一晚小生宅へ宿ルツマリニテ御出デ下サレタシ午後カラデモヨシ」と手紙を書いており、それに従ったのである。一首目には、本人はいうまでもなく、母親までが高ぶっているさまがうたわれている。二首目の「念仏」には、父の病氣の平癒祈願の気持ちと前年に亡くなった祖母を供養する気持ちがこめられているのであろう。その念仏を哀草果は隣室で聞いているのである。このとき哀草果が数日間茂吉の生家に泊まったことが、福島の間春雄宛の茂吉との寄せ書き、「二十四日午前九時五十五分発にて上ノ山を出発するゆゑ福島には午後一時と二時の間に著くかと存じ候何分よろしく願上げ候」によってわかる。

いそがしき田耕をやめてあが妻に着物を出さず師に逢はむため

この歌には「春日雑詠」の題のもと「斎藤先生帰省す」との詞書がある。茂吉は大正十年春、長崎医学専門学校教授の職を辞して帰京し、五月に一週間余り郷里の金瓶に帰省して

おり、金瓶からの手紙に、「九日夜帰宅。哀草果にあひ申候」
〔五月十二日、赤彦宛〕、「羽前に来て結城哀草果とあひ申候」
〔五月十四日、高谷寛・他宛〕とあるからこのときのことであらう。茂吉はこの年のうちに渡欧するからこの金瓶帰省が父との永久の別れになった。

古泉千樫への哀草果との寄せ書きに茂吉は、「山の若葉は東京よりもまる一月おくれてゐて、通草の花は山は盛にならぬ位なり」(五月十二日)と書いている。

哀草果は、大正十二年に「ウインなる斎藤先生を偲びて」(詞書)、

白頭翁おきなぐさ咲きそめにけりつれられて一日あそびし野辺は
なつかし

とも詠んでいる。「白頭翁」が咲くのを見て「つれられて一日あそびし野辺」を思い出したのだから、右に挙げた五月のときのことだろう。ちなみに白頭翁は茂吉のとくに好きな花であった。

茂吉は大正十三年十二月三十日にヨーロッパから帰国するとき、香港、上海間の船上で青山脳病院全焼の電報を受けた。このとき茂吉は、「おどろきも悲しみも境過ぎつるか言絶えにけり天つ日のまへ」と詠んでいる。そして、一月七日に東京の焼け果てた家に帰りついた茂吉は、「焼あとにわ

れは立ちたり日のくれているりも絶えし空しさのはて」「かへり来し家にあかつきのちやぶ台に炎の香する沢庵を食む」「くるこげになりたる書をただに見て悔しさも既わかざるらしも」等と詠んだ。

哀草果は帰国した茂吉に会うために上京しようとする。これに対して茂吉からは、「御上京は少し御延し願ふ。いま来ても、ゆつくり話する処もなし」「上京は農事の忙しくならない前の方よろし」などの手紙があり、結局は三月になったことが茂吉の哀草果宛の「東京上野駅に朝五時五十五分著の由なるが、……必ず一二等待合室で待つてゐて呉れ玉へ」(大正十四年三月八日)によつてわかる。

焼け跡の家に着いた哀草果は、

さ夜なかと夜は更けにけりここにして師の大きくるし
みを思はざらめや

師のなげきはわれのなげきと思へよと故郷の妻に手紙
書きにけり

独逸よりおくられし書もろともに灰となりて飛ぶ焼跡
の空

と詠む。一首目の結句の反語にこめられた悲しみ、二首目の、妻に手紙を書かずにいられない「なげき」の深さを味わうべきであらう。

鬼怒川紀行(2)

夏目勝弘

長塚節の「竹の里人(1)」に(先生と自分との間柄は漸く三十三年からのことで極めてあつけないことであつた。…併し年に四五回は上京して時には一ヶ月も滞在したこともあつて、勿論その間といふものは殆ど隔日位は詰め掛け(以下略)。

歌人の竹の里人おとなへばやまひの牀に繪をかきてあり

そしてその時に伊藤左千夫と出合い、意気投合し本所の左千夫の家で夜明けまで、激論をかわしたとある。

生家より根岸庵に通つた道を、ボランテアの案内人に聞き辿ることにした。

雑文(写生断片)より(小春の日光は岡の畑一杯に射しかけて居る。岡は田と樅林と鬼怒川の土手とで圍まれて他の一方は村から村へ通ふ街道へおりる。田は岡に添うて狭く連つて居る。(以下略)

今は四月下旬、緩やかな岡の道を汗を滲ませながら歩いて行く。樅林はも畑となつて、キャベツの収穫あとの下葉の付いた株が残っている。横の畑には次のキャベツの苗が植えられた広い黒土の上に、小さな緑が点々と岡であつたであらう曲線上に連つている。

田は農地改良後の広い田が整然と続く、狭く連なる田など一枚も無い。

蛙らは皆塗り込めの畔越えて遠田こち田鳴きめぐるらし水の張られている田が所どころに見られるのみ、その一枚の田で蛙が乏しく鳴ている。

菜の花の乏しきみれば春はまだかそけく土にのこしてありけり
キャベツの花が少し残っている畑中の道を鬼怒川の土手

をめざして歩みを進める。

「写生断片」より

世間は復た春が鮮生つた。鬼怒川の土手の篠の上に白帆を一杯に孕んで高瀬船が頻りにのぼる。…篠の中には鳥馬がそつちへこつちへ移りながら下手な鳴きようをし菜の花から麦畑へ遊びに出る。(以下略)

篠竹の藪は今もあり、ツグミの姿はもう見られないが、ウグイスの鳴き声が絶えることなく聞えてくる。

背丈を越すカラシナが土手の両側より道を狭め、花粉が袖に時には顔に付く、その匂に酔うほどであつた。

鬼怒川を夜ふけてわたす水棹の遠く聞こえて秋だけにけり

今はもう渡し舟は無い、池のような流れのない今日の鬼怒川。子規の許へ、もどかしく渡舟で渡つたことだろうと、堤道を過ぎ平成二十三年十一月に貫通した新鬼怒川大橋を渡り石下イシノに着く。

豊川の君棲む庭は狭けれど葭割鳴かば足らずしもあらじ
子規の死後左千夫とも遠のいたようであるが、三十八年一月十二日に、百穂筆の絵はがきに

腹もへり日もくれぬればすみかまのさま計り置きいさ
あすにせむ

乙巳一月十二日

左千夫

記念はがきの返事など難有ない

三十八年以後旅行詠が多くなる。炭焼にて旅費を作つたの
だろうか。

明石瀧あみ引くうへに天の川淡路になびき雲の穂に没る
旅行ずきの長塚節の一首。自分も秋には明石、淡路への予定
定をしている。

「氷魚」のことから (140) 岡本八千代

英国の物理学者ピーター・ヒッグス博士の「ヒッグス」という名をとって、「ヒッグス粒子」とみられる新粒子の発見の報道があつて、私なりに驚いていた。「神の粒子」とも呼ばれるとか。また、大雨洪水、土砂崩れの難、かくして梅雨は明けた。

そしていよいよ、ロンドンオリンピックがあと二日(七月二十七日)にはじまろうとしている。やはり、なんとなく落ち着きのない自分を感じながら、子規の小説「当世媛鏡」のつづきを書こうとする。

十五。十九。(その年の夏)

十五。

○中谷という人の一枚の写真に、才吉と、ある令嬢が写っていた。お清は何事も手につかないほど心が焦っていた。

○そこへ「母の病氣危篤」の才吉からの手紙が来た。お清の働いている諸越楼もろこしろうの主人に話して暇を乞うたが許されなかった。女中頭のお瀧に相談したら、「糸井さんのいうなりになりさえすれば名策」と。

十六。

○お清にとって叔母(才吉の母)は親ほど頼りにしていた人。その叔母が病氣とあれば、何をしてでも逢いたい。

○お清は、武士の娘という勇気が湧いて、夜十時を過ぎて、

賑わいの最中の諸越楼から逃げ出した。
十七。

○東京までゆく夜道の心細さ、恐さの中で一人の男に出会うお清。

○夜の深む中「今宵は私の家へ泊りなさい」といわれ、ついに泊まるお清。

十八。

○その男の一軒家は、老婆と男の二人暮し。貧しくがらくたなどの道具が並べてあつたが、中に二つ三つのその家に不相応に貴い品が交わっていた。

○疲れ果てていたお清は、いつの間にかぐっすり眠り、朝となった。

○お清に、男が委細の訳を尋ねた。男は年頃三十計りの色浅黒く、鼻筋の通った、優しそうな人相で、言葉さえ和らかであつたので、ついにお清は一伍一什いちぶしじゅうを話した。

○お礼をのべて帰ろうとすると「警察の手が廻つて、引っぱられるかも」といわれて、また泊り、ついに、男に料理屋奉公、家の下働きをとせめられた。

十九。

○お清は、やっと敵の術中にはまつたと気づいた。

○男と老婆は、あの女(お清)はきつといい家の生まれだろうから、遠方へ追いやつて金にしようとした。

○清が、雑仕事をしていたら、耳元にひびく靴音がした。

——次回へ。

ことのはスケッチ (405) 今泉 由利

『川開き』

享保十八年、水神様をお慰めする花火を打ちあげたのが「両国川開き」のはじまりです。

昭和十三年より二十二年まで途絶えていたのを、江戸時代からつづく格式高い柳橋の料亭『いな垣』の稲垣平十郎さんが再興をされたのでした。

時は過ぎ、孫の米山明子さんが、江戸小唄の市丸さんが棲んでおられた柳橋、隅田川ッ淵の日本家屋を舞台に「川開き」を催されます。

去年の川開きに、縁あってお邪魔しました。

隅田川と同化。安心のなかに帰りついたような、小振りの二段重に、美しさと、美味しさが詰め合わされ、お酒と川風と。人を持って成す心遣いがしつとりと伝わるのでした。もちろん今年の川開きにもお世話になりました。「この家で、ヨガ」をしますから」と。隅田川を渡って来る風が心地良い広間での、ヨガに参加させていただくようになり、四、五人のために先生が来て下さり、「何のための動作であるか」「骨格、内臓に至る説明をして下さる、ヨガ」なのです。

帰りには、何センチか背がのび、身も心も軽く、忍者になつたように速やかに歩きます。

外国住いから日本に帰り、「外国で出来なかつたことをしよう」と、三味線と小唄をはじめました。

『柳橋から 小舟で急がせ 山谷堀 土手の夜風が……』
『夕立のさつとひと降り隅田川 涼しい風に稲妻が……』

見知らぬことを唄っているのも能がないと、柳橋を確かめにゆき、神田川が柳橋をくぐり隅田川に合流するところ両国橋。ミヤコドリが飛び交って……。ここに何度もスケッチに通うこととなり、隅田川に架っている橋を全部描きたい、と思つてしまつた。

まず最初は、レインボーブリッジから、芝浦側からお台場まで歩いてみた。風がビュンビュン、車の轟、そのうえゆさゆさ振動した。この長い橋は晴海ふ頭まで離れて描いた。

隅田川の川上に向かい幾月日。橋がはねあがる築地のところ勝鬨橋。住吉神社にお参りし、佃者を持ち帰った佃大橋。赤穂四十七士は永代橋を渡つて泉岳寺へ。中央のタワーからのワイヤーをいっぱい描いた中央大橋。水天宮の隅田川大橋。芭蕉像が川を見ている清洲橋。広重の「大はしあたけの夕立」新大橋。両国の花火。二代將軍秀忠の時代、94棟の米蔵があつた蔵前橋。米蔵に米を運ぶ馬が沢山飼われていた厩橋。どぜうを食した駒形橋。出来たてビールの吾妻橋。「名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしや」在原業平を偲ぶ言問橋。長命寺の桜餅をいただきますながらスケッチした桜橋。白髭橋は白髭神社。ほんとうに在原業平が詠んだのはこの辺り。

隅田川とは興味深い。スケッチをはじめた頃は、川土手は不法住いをしてる人がいっぱい描きづらかつたけれど、いつの間にか素晴らしく変つた。

柳橋のヨガに通いながら、またたつた今の隅田川を辿つてみようと思う。

和菓子街道 (71)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

膳所をあとにし、大津宿の中心部を目指す。途中、旧道沿いに「御饅頭處」と書かれた大きな古い木製の看板を掲げる店を見つけて、吸い込まれるように入った。

240年前からここで菓子を作り続けている餅兵は、現当主で八代目を数える。庶民的な餅や団子、饅頭などを作る、いわゆる「おまん屋」さんだ。当初は旅人相手にぜんざい餅を食べさせる茶店だったので、今も店内の緋毛氈を敷いた床机に腰掛けて店の菓子を頂くことができる。

「おもしろいものがあるんですよ」とご主人が見せてくれたのは、朱塗りの四角い銘々皿。茶店時代に使っていたものだそう。当時はほとんど使い捨てだったというから、なんとももったいない。数枚だけ残



っているというこの角皿にわらび餅を載せてくださったので、贅沢なタイムスリップを味わうことができた。

貴重な江戸時代の塗りの角皿でわらび餅を。

◆餅兵

住所：滋賀県大津市中央2-5-37

電話：077-522-7356

お知らせ

▽十月号原稿は、九月一日(土)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考慮あわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

原稿の送先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△オリンピックが始まった。開会式、入場の各国の選手達、どの顔も晴れやかで美しい。平和の祭典これこそ人類すべての願いである。

それにつけても、尋常ではない(このところの暑さ、会員の皆様如何おすごしでしょうか、私を含め高齢者の多い三河アラギ会員何よりも熱中症が心配です。

日中は家の中で涼しさを求めて休養することをお勧めします。そんな時にも短歌はできる、そう思うのですが!! (小野) △秋には、吟行、集い、勉強会…催したいものです。ご希望など、編集部までお寄せ下さい。暑く、外出ままならない時は、夏安吾よろしく、知識を蓄えておきましょう。いつかきつと、歌となつてほしい(今泉)のために。

三河アラギ規定

◇「三河アラギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アラギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アラギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一カ年分二万円の前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十四年八月二十五日印刷 第五十九巻第九号
平成二十四年九月一日発行 定価 六百円

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目勝弘

発行人

平松 裕子・山口千恵子

発行所

今泉由利

三河アラギ会

印刷所

三河アラギ発行所 千四四一〇三二一

URL

豊川市御津町御馬西三七

印刷所

TEL (〇五三三)七五二〇〇九

印刷所

振替口座 〇〇八三〇一六二五三九

印刷所

E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp

印刷所

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜創美